

災害対応への意識向上目指し



10月7日に実施された平成26年度防災訓練

平成26年度防災訓練を実施

本院の災害対策マニュアル及び消防計画のもとに、近畿地方を震源とする震度6強の地震が発生し、大阪府下で多数の被害傷病者が発生したとの想定で、台風一過の秋晴れのもと、10月7日に防災訓練を実施しました。

まず、リハビリテーションシヨン部内に金倉讓病院長を本部長とする災害対策本部を立ち上げ、院内各部署から入院患者さんの安否や空床数の確認、被害傷病者用の収容ベッドの確保などの院内情報を収集する訓練を行いました。

続いて、本院が災害拠点病院としての役割を果たすことを目的に、本部長の指示の下、被害傷病者を受け入れる「トリアージ訓練」を行いました。外来棟1階玄関ホールの「トリアージエリア」では、症状に応じてトリアージによる選別を行い、赤・黄・緑・黒色の各トリアージエリアに被害傷病者を誘導・搬送し、医師や看護師が診療にあたりました。これらの情報を放射線部受付横に設置した「指揮所」で集約し入院手配などの適切な指示を行いました。なお、今回は模擬患者役として、本院薬剤部で実習を行う薬学部(病棟1階)で実施しました。

終了後は、外部評価者の梅田幸治特任教授(本学安全衛生管理部)から①各エリアのリーダーが部員に適切な指示を与えることができず、たか②各人が持ち場で失敗を恐れず取り組むことができたか③大きな声で対応できたかなどについて示唆に富んだ講評をいただきました。

今後も本院の医療従事者一人ひとりが、災害時の対応に関する意識を向上させ、あらゆる観点から本院の災害対策の整備・強化を図ってまいります。

国際医療シンポジウム

「漕ぎ出せ、グローバル医療!」
『新咸臨丸』!!



8月に米サンフランシスコで開催 国際医療センター設立1周年

8月30日にサンフランシスコ市内のホテル、Taj Campton Placeにおいて、「大阪大学国際医療シンポジウムGo Global!! 3」を開催しました。

海外開催は今回が初めての機会となります。平野俊夫総長の開会の挨拶にはじまり、在サンフランシスコ日本総領事館の渡邊正人総領事の来賓挨拶、星野俊也副学長の基調講演に続いて、本院未来医療開発部の澤芳樹国際医療センター長、中田研・南谷かおり両副センター長が、医療の国際化の重要性や課題、そして本学の取り組みについてそれぞれ講演を行い、大学院人間科学研究科の中村安秀教授からは、母子手帳の海外での普及活動の紹介がありました。

本院では、昨年4月に未来医療開発部に国際医療センターを設置し、1周年を迎えました。さらに本年7月には大学院医学系研究科に国際・未来医療学講座を開講しました。本シンポジウムのテーマである「漕ぎ出せ、グローバル医療!『新咸臨丸』!!」の表す通り、本学の国際医療に対する決意を十分に示すことができました。

診療科を越えて 移植医療の定着に尽力

10周年を迎えた 移植医療部

移植医療部は平成15年、診療科の垣根を越えて、臓器移植・造血幹細胞移植・臓器提供などの移植医療全般に関わる中央診療部として、全国に先駆け発足しました。平成22年には、改正臓器移植法(15歳未満からの臓器提供や、本人の意思が不明な場合、家族の承諾で臓器提供が認められる)が施行され、脳死下の臓器移植が飛躍的に増えました。

本院は日本で初めて、心臓・肺・肝臓・腎臓・脾臓・小腸など、全ての臓器の脳死移植が認められた移植施設であり、平成25年度までに、心臓51例、肺38例、心臓同時2例、肝臓18例、脾臓同時(脾臓単体含む)31例、腎臓27例、合計167例の脳死移植を行い、造血幹細胞移植においても長い歴史を持ち実績を上げています。

このような移植医療を、全診療科のチームワークにより円滑に実施していくことが同部の役割であり、臓器移植を担当する各診療科の医師が兼任で運営し、日本で最も多い4名の看護師が、専従のレジピエント移植コーディネーター(移植候補者との連絡や臓器の受け入れを調整する専門職)として、患者さんやご家族をサポートしています。

また本院における臓器提供の素地を調えるため、院内コーディネーター(ドナー・コーディネーター/ドナーからの臓器提供を調整する)の制度も立ち上げました。「ご家族に寄り添い、助けられない患者さんの最後のあり方の一つとして、臓器提供という選択肢を考えたい」と、福富教偉副部長は話します。

10周年を迎えた同部は、患者さんやご家族の精神的・経済的問題にも診療科の枠を越えて対応するなど、疑問に思うことをひとつひとつ解決しながら、日々本学の移植医療の定着に尽力してきました。ドナーやご家族のご意思が無駄にならないよう、移植手術を受けた患者さんに、感謝の気持ちを持っていただくことも重視されています。生体移植や脳死移植の待機者が増加するなか、目指しているのは「心のこもった移植医療」の実現です。



移植医療部のスタッフ

ホスピタルミニニュース HOSPITAL MINI NEWS



7/23 一日看護師体験



8/24 ハートセンター夏祭り



9/10 ANA 航空教室



9/24 病院見学会



10/10 秋のミニコンサート

ホスピタルパーク自動ドアの夜間閉切

夜間の防犯対策のため、9月1日からホスピタルパーク出入口の自動ドアを夜間閉切ることとしました。

下記時間帯にホスピタルパークに出られる場合は、入院センター出入口からお回りください。ご不便をおかけしますが、ご協力の程よろしくお願ひします。

なお、緊急時は自動ドア下部にあるプラスチックのカバーを外し、解錠して通行が可能です。

記

夏季(5月~9月) : 20時30分~翌朝5時30分

冬季(10月~4月) : 20時~翌朝6時

ガールズバンドが入院中の子供達と交流



本院にガールズバンド「SCANDAL」の4名が来訪し、入院中の子供達と交流を行いました=写真。今回の来訪は、メンバーの「(曲作りのための)アンケートに答えてくれた子ども達に直接会ってみたい」という思いから実現したものです。

メンバーは、「テーマソングと一緒に歌えるような曲に仕上げるので、みんなの声で形になった曲をぜひ聴いてほしい」と意気込みを語りました。

参加者募集

市民公開フォーラム

「がんと暮らし」いきいきと生きるために

- 日時 12月6日(土)午後1時~3時30分
- 場所 大阪大学医学部講義棟A講堂
- 募集人員 240名(先着順)※定員になり次第メチ
- 申込メチ 11月27日(木)【必着】
- 講演内容

1. がんと共に生きるための心の持ち方と注意すべき症状
大阪大学保健センター 講師 谷向仁
2. がん治療に伴う外見の変化への対応(脱毛を中心に)
大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学 特任研究員 後藤 雄子
3. がん治療と仕事の継続について
NPO法人 がんと暮らしを考える会 理事長 賢見 卓也

- 申込方法 FAX、メールまたはハガキに必要事項(①氏名②郵便番号③住所④年齢⑤性別⑥電話番号⑦参加人数(4名まで可))を明記のうえ、下記へお申込みください。

注) FAXからは、頭に186(番号通知)をつけておかけください。注)車いす利用者など支援が必要な方は、予めお問い合わせください。

宛先 〒565-0871 吹田市山田丘2-15

大阪大学医学部附属病院総務課広報評価係

TEL:06(6879)5020,5021 FAX:06(6879)5019

E-mail: ibyou-soumu-kouhyo@office.osaka-u.ac.jp

- 決定通知 参加の可否をハガキでお知らせします。

気管支鏡検査中のスタッフ



呼吸器内科は肺がん、間質性肺炎、慢性閉塞性肺疾患(肺気腫・慢性気管支炎)、呼吸器感染症など、あらゆる呼吸器疾患の診療を行っています。肺がんは日本人のがん死因のトップで、ますます増え続けており、当科でも入院患者さんの7割を占めます。しかし近年、肺がんの原因となる遺伝子異常が発見され、特効薬としてEGFR阻害剤のイレッサ、タルセバ、ジオトリフ、ALK阻害剤のザーコリ、アレセナなどの分子標的薬が使えるようになりました。特に肺がんの中で最も多い腺がんでは、遺伝子診断を行い、それに応じた治療薬を患

者さんごとに選択していくという治療方針に変わり、発見時に転移があるような肺がんの予後も飛躍的に伸びています。従って、組織診断(生検)の重要性は増しており、従来生検が難しかった2cm以下の腫瘍に対して、当科では超音波プローブ(探触子)を用いた気管支鏡検査を行い、正診率向上に努めています。呼吸器センターでは、週1回の合同カンファレンスで、外科、放射線科、内科各分野の視点から治療方針を検討し、患者さんに最適なつQOL(生活の質)に配慮した治療を選択して頂きます。抗がん剤が必要な患者さんは、入院治療により安全性を確かめた後に退院していただき、外来化学療法室での点滴を継続していきます。いろいろな治療が必要な境界領域の患者さんに対す

呼吸器内科

遺伝子診断により肺がんの予後が向上

疼痛医療センターは、患者さんのため平成18年に開設されました。



頭部に磁気刺激を与えることで、鎮痛効果につながる

疼痛医療センター

「痛みの本質」に迫り心身を包括的に治療

痛みは患者さんにとって、最も深刻な症状です。一人一人の患者さんの痛み、苦しみを十分に理解したうえで適切な個別治療を行うため、麻酔科、神経内科、整形外科、神経内科・脳卒中科、神経科・精神科に、薬剤師、理学療法士、作業療法士、臨床心理士などが緊密に連携し、患者さんのQOL(生活の質)やADL(日常生活活動度)に配慮したチーム医療を行っています。

「痛みの診療と研究に特化した専門組織は、日本では新しい試み。従来のような診療科別のアプローチでは治療しなかつた難治性の痛みを持つ患者さんが、全国から来院されています」と、センターの基盤づくりに携わる柴田政彦教授(疼痛医療センター・疼痛医学)は話します。ストレスなどの心理的要因にも着目し、昨年6月、初診の患者さんに対する「特殊外来」を新設。毎週金曜日に、医師・臨床心理士・理学療法士による丁寧な問診を行い、各診療科の専門医による診断の後、投薬・リハビリテーション・運動療法・認知療法・神経ブロック・手術・神経刺激療法など、患者さんに合った適切な治療を提案しています。

治療法の開発にも取り組んでおり、齋藤洋一特任教授(脳神経外科)は、慢性疼痛に対する経頭蓋磁気刺激療法を開発し注目されています。齋藤特任教授は「頭蓋骨の外側から頭部のある部分に磁気刺激を与えることで、鎮痛効果が確認されています。患者さんの身体への負担が少なく、在宅で使用できる装置を共同開発し、来年には治療を開始する予定です」と話し、さらに、リアルタイムで脳磁図(脳機能)を視覚化したものによる脳のトレーニングで痛みを軽減する研究も進めています。痛みには未知の部分が多いですが、このよう先進的な診療・研究により疼痛医療の発展に貢献し、今後の標準的治療を確立していきたいと考えています。

疼痛医療センターの学術セミナーの様子



る集学的な治療も積極的にを行っています。肺がんに次いで入院患者さんが多い「間質性肺炎」についても、近年、経年的な呼吸機能の低下を軽減させる薬剤が開発されてきています。これらの薬剤を適切に使用し、患者さんの予後、QOL改善を目指しています。

患者さんが多い「間質性肺炎」についても、近年、経年的な呼吸機能の低下を軽減させる薬剤が開発されてきています。これらの薬剤を適切に使用し、患者さんの予後、QOL改善を目指しています。

受賞

●7月26日「第24回 ARMAM 賞」受賞
医療技術部(臨床検査部) 豊川 真弘

●8月29日
「第12回(平成26年度)産学官連携功労者表彰(経済産業大臣賞)」受賞
未来医療開発部(未来医療センター) 名井 陽

●9月6日
「平成26年度臨床化学会学会賞 Young Investigator Award、平成26年度臨床化学会学会賞奨励賞」受賞
医療技術部(臨床検査部) 井上 直哉

●9月11日
「日本診療情報管理学会 優秀論文賞」受賞
医事課・医療情報部 堀島 裕之